

書籍「障害者福祉ビジネス～食いものにされる税金と利用者～」に寄せて

9月17日、集英社新書から共同通信記者・市川亨氏の「障害者福祉ビジネス～食いものにされる税金と利用者～」が出版される。

このタイトルを見たとき、私は一人の福祉の現場にいる者として、単に「問題のある事業者を告発する本」として読むのではなく、むしろ私たち福祉に関わる者自身が、「福祉とは何のためにあるのか」を改めて問い直す機会になるのではないかと思った。

市川氏は、障害者就労支援、介護、精神科訪問看護、ホスピス型住宅など取材し、利益を優先する事業者によって、利用者や家族、そこで働くスタッフの生活までもが損なわれる実態を追っているという。
これは決して他人事ではない。

福祉は、公的な制度と税金によって成り立っている。
つまり、福祉事業者が受け取る報酬や助成金の背景には、社会全体が負担している大切な財源があり、そしてその先には、一人ひとりの利用者の人生がある。

だからこそ、福祉事業を「事業」として継続していくことと、「利益を上げること」を最優先することとは、同じではないはずだ。

事業を継続するためには、当然、収益が必要になる。職員の生活を守るためにも、適正な利益は必要である。設備を整え、サービスの質を高め、新しい支援に挑戦するためにも、経営基盤は欠かせない。
問題は、「利益を得てはいけない」ということではない。

何のために利益を生み出すのか。

そこが問われているのだと思う。

利用者の生活をより良くするために利益を生み出すのか。職員が安心して働き続けられる環境をつくるために利益を生み出すのか。新しい支援を生み出し、社会の課題を解決するために利益を生み出すのか。

それとも、利用者を「サービスを購入してくれる人」として捉え、制度から得られる公費を、事業者の利益を最大化するための手段として考えてしまうのか。

この違いは、とても大きい。

私は、市川氏がこの本で投げかけようとしている問いは、後者への警鐘だけではないと思っている。

むしろ、「利用者ファーストを基本にしながら、福祉事業を持続可能なものとして成り立たせることはできないのか」
という、もっと根本的な問いなのではないだろうか。福祉には、一般企業とは違う使命がある。利益だけでは測ることのできないものを扱っているからだ。

一人の利用者が、昨日より少し笑えるようになった。
外に出ることができた。
誰かと話すことができた。
自分で決めることができた。
地域の中で「自分らしく生きていていい」と思えるようになった。

こうした変化は、損益計算書には数字として表れにくい。しかし、それこそが福祉の価値なのだと思う。だからこそ、福祉事業の経営には、一般的な企業経営とは違った「ものさし」が必要になる。

売上や利益だけではなく、
「利用者の人生がどう変わったのか」
「本人の尊厳が守られているのか」
「職員が支援することに誇りを持てているのか」
「地域にどのような価値を生み出しているのか」
という視点が必要なのではないだろうか。

私自身も、支援の現場にいるからこそ、自分たちの活動を常に問い直さなければならぬと思っている。
「この支援は、本当に利用者のためになっているのか。」
「支援者の都合を、利用者のためという言葉で正当化していないか。」
「制度があるから支援するのではなく、本当に必要な支援を制度の中でどう実現するかを考えているか。」
こうした問いを持ち続けることが、支援者としての責任なのだと思う。

そして、市川氏の今回の著書は、福祉事業者を一括りに批判するためのものではなく、むしろ、真摯に利用者と向き合っている福祉事業者にとっても、大切な問題提起になるのではないかと思う。
「福祉だから儲けてはいけない」のではない。
「利用者を幸せにすることと、事業として持続することを、どう両立させるのか」
そこに、これからの福祉の大きなテーマがある。

私は、利益を否定する福祉ではなく、「利用者ファーストだからこそ、社会から必要とされ、結果として事業としても成り立つ福祉」を目指すべきだと思っている。

利用者に選ばれる。
家族から信頼される。
職員が誇りを持って働ける。
地域から必要とされる。
その積み重ねの先に、健全な経営がある。
それは決して簡単なことではない。

しかし、福祉を「人の人生を支える仕事」として続けていくのであれば、そこから逃げてはいけないのだと思う。
市川氏が『障害者福祉ビジネス——食いものにされる税金と利用者』という、非常に強い言葉をタイトルに掲げたことにも、私は意味があると思う。
強い言葉だからこそ、私たちの心に刺さる。
そして、その刺さった言葉を「自分たちとは関係のない問題」として終わらせるのではなく、
「自分たちはどうなのか」と自分自身に問い返す。
それが、支援者に求められる内省なのではないだろうか。

市川氏の長年にわたる取材と問題提起に敬意を表したい。
そして、この一冊が、福祉を「利益か、非営利か」という単純な二項対立で考えるのではなく、
「人を大切にしながら、どうすれば持続可能な福祉をつくれるのか」
を社会全体で考えるきっかけになることを期待したい。

9月17日の出版を、一人の福祉の現場にいる者として心から応援したい。
そして私自身も、この本から投げかけられる問いを受け止めながら、
「利用者ファーストとは何か」
「支援者としての利益とは何か」
「福祉事業を続ける意味とは何か」
を、これからも自分自身に問い続けていきたいと思う。

福祉は、ビジネスになれるのか。
私は、「なれる」と思いたい。
ただし、それは人を利益の対象にするビジネスではなく、人を大切にするこ
とで社会から必要とされ、その結果として持続できるビジネスでなければなら
ない。
その可能性を追求することこそ、これからの福祉を担う私たちに課せられたテ
ーマなのではないだろうか。